小泉八雲と仏教

XXXXXXXX博士

XXXX大学

インドおよび日本の仏教におけるヘレニズムの影響

小泉八雲による日本仏教に深く切り込んだ研究は、インドで誕生し、ギリシャから思想の種をもらい受け、日本で花開いた仏教の長い歴史に、新しい長いページを加えることになります。

ギリシャと仏教の関係は非常に深く、その根は釈迦本人にまでさかのぼります。

アッサラヤーナ経（阿摂惒（和の下に心）経）,で、仏は若いバラモンであるアッサラヤーナに対し、インドの歴史で初めてギリシャ人（パーリ語でヨナ）とその社会構造について市民がカースト制度で分断されていないと語りました。このことから、仏が最初の修行集団を民主主義の形態にしようとしたその基準を古代ギリシャ社会に求めていたことがうかがえます。

ギリシャ人によるインド宗教の系統的な研究は、紀元前326 年にアレキサンドロス大王がインドに入ったときからはじまります。

このマセドニアの王は、哲学を熱心に研究しており、インドへの遠征でも哲学者を何人か連れていっています。

そのうちの1 人が古代最初の懐疑論者で知られるピュロンです。インドからギリシャに戻ることができた哲学者はピュロンだけで、帰国後哲学を学ぶ学校を設立しました。

この学校で教えていた認識論とその実践は非常に仏教のそれと似通っていたため、ここから比較哲学の研究対象となっただけでなく、ドイツのギリシャ哲学研究家であり自身も哲学者であったフリードリッヒ・ニーチェがピュロンを「ギリシャの仏」と呼ぶ理由ともなりました。

中央アジアおよびインドでアレキサンドロス大王の後を継いだセレウコス一世は、娘のヘレンをマウリヤ朝の初代王チャンドラグプタの息子ビンドゥサーラと結婚させ、インドとの関係をさらに強固なものにしました。

その結果、イギリス歴史家のサー・ウィリアム・ウッドソープ・ターン氏は、ビンドゥサーラの息子が、マウリヤ朝で仏教を国教としたアショーカ王である可能性があり、つまりアショーカ王はギリシャ人とのハーフであるという説を唱えています。

仏教という新しい宗教に対し、ギリシャとヘレニズム文化は非常に大きな影響を与えました。

アショーカ王の柱として知られている塔には、ギリシャ語で書かれている部分もあります。

それだけでなく、小乗仏教のテラヴェーダ仏教仏典であるディーパヴァンサとマハーヴァンサには、ギリシャ人で仏教を学び、教えている人のことが書かれています。

この他の古代仏典である「ミリンダ王の問い」には、ギリシャの王であるミリンダ王はインドの宗教に帰依したと書かれています。ミリンダ王は中央インドまでその王国を拡大しています。

八雲は、この仏典から引用文を、再個体化と魂の否定という仏教論理と共に紹介しています。この論理は、「ミランダ王の問い」の中でミランダ王とナーガセーナという仏法者との観念的な対話という形で紹介されています。

ギリシャの弁証法と形而上学が仏法の考え方に取り入れられ、 シンプルな原始仏法が多様で多神を取り入れた普遍的な哲学を有する世界宗教へと文字通り変化し、後に発達する大乗仏教へと進展していくのです。

ヘレニズム風の彫刻が取り入れられ、ガンダーラ美術およびマトゥーラ地方に残る仏教美術ではアポロ－ン像の形が仏像に影響を与えたことが明らかに分かります。

ギリシャ衣服のキトンをまとい、カールした髪の毛を持つ仏像のスタイルよく知られていますが、クシャーナ王朝のクジュラ王のコインには、ギリシャ語でΒΟΔΔΟ「ブッダ」という名前と共にその姿が刻まれています。

古代ギリシャの影響はあらゆるところに見られます。たとえば、インド東部のマハーラーシュトラ州にあるカーラ、ナシク、およびジュナーの仏教石窟には、寄進したギリシャ人の名前が刻まれていますし、5～6 世紀に中央アジアにあった遊牧国家エフタルの碑文や壁画、中央インドおよび北インドの仏教建造物にもギリシャ文字やギリシャ神話に素材を得たものが数多く見つかっています。

ギリシャでは、仏について最初に書かれた文章が、初期神学者のアレクサンドリアのクレメンスやヒエロニムス、ダマスコの聖ヨハネの現存する著書に見られます。

ゴータマ・シッダータの一生も、キリスト教風にアレンジされて、一般にもよく知られており、ダマスコの聖ヨハネに元々関連付けられていた伝記小説「バーラームとヨサファット」として紹介されています。

アラブおよびイスラム勢力が中央アジアに進出するとともに、ギリシャとインドのつながりは途絶えるようになってきます。

同時に、その頃仏教はインドと中央アジアでさまざまな圧力をかけられており、新天地を求めて東アジアや極東へと広がっていきます。

ギリシャ芸術の要素と哲学的な考え方は仏教と共に、552 年には朝鮮半島と日本へひろがります。

数多くのヘレニズム文化の影響が日本の仏教遺跡に残っています。

飛鳥時代の屋根瓦には、ギリシャの花文様（葡萄とツタの絡まる絵など）がデザインに組み込まれています。

鎌倉にある有名な大仏像など、仏教彫刻の衣服、髪型、体型には、グレコ仏教芸術の要素が多く見られます。また、仏教寺院の入り口にある金剛力士像など諸天善神たちの彫刻にはヘラクレスとゼウスをほうふつとさせるものがあります。

また、仏教絵画の中にも、ビザンチン聖像と共通点が見出せます。

現代ギリシャと日本仏教との接点は細々と続いており、ギリシャ人旅行者や船乗りたちのもたらす印象としてギリシャに伝わってきます。

海の詩人として有名なニコス・カバディアスは、彼の感じた特徴を1933 年に発行された「マラブ」という詩集にある「船乗りたちの祈り」という作品で表現しました。

「日本の船乗りたちは、眠りにつく前に、船のへさきで静かな場所を見つけ、長い祈りをささげる。静かに膝をつき、黄色い仏像を前にして、船乗りは額ずくのだ。」

もっと詳しく総体的に説明したものとしては、ギリシャ人学者で作家でもあり、日本に住んでいた小泉八雲の日本の仏教、宗教、哲学に関するエッセイ、ニコス・カザンザキス氏の仏教に関する哲学的および演劇的エッセイ、元駐日ギリシャ大使のジョージ・シオリスによる「出家僧の修行律と正教の修道士」、スティリアノス・パパレクサンドロボロス教授による日本の仏教、ことに道元の禅に関する著作、ジョルジオ・ハキリス教授によるじ「浄土宗」、ジョージ・クロノス教授による「修験道と仏教」、マリアナ・ベネタトウ教授による「仏教と比較哲学」、その他数多くあります。

日本への仏教伝来

それでは、仏法はどのように日本へ伝わり、浸透していったのでしょうか。

日本の原始宗教である祖先崇拝の神道と、魂の存在を否定し、生命の永遠性を説く仏法は、根本的な違いがあるという点に重要なポイントがあります。

この質問に対して小泉八雲が洞察したのは、仏教は、死者の魂は次に生れるまで100 年間その存在が継続するというように哲学的な世界観を変化させることを余議なくされ、神道の主な神々を仏法の諸天善神として取り入れるだけでなく、その一部を仏陀の生まれ変わりだとすることで、仏法は受け入れられるようになったのではないか、という点です。

因果の法則にもとづいた業という考え方は、生命の継続を信じることが誰もが現在の状況は自分の責任であるということを認識することにつながってきます。

生きとし生けるものの状態や環境はすべて、過去に自分がおこなった行動の結果です。

よい事をすればよい状態でよい環境に生まれ、悪い事をすれば六道に落ち、人間ではなく動物に生まれることもあり得ます。

同じように、死者は、残されたものが興味を持とうが持とうまいが関係なく、死者自身が生きていたときの行動によって、死後が幸福か不幸かが決まると説きます。

生きとし生けるものすべてに慈悲を持って接し、苦しんでいるものには手を差し伸べよという仏教の教えは社会全体の習慣や行動に大きな影響を与えました。

小泉八雲は、天武天皇が獣肉を食することを禁止し、わなや槍を使った狩猟を禁じた令を引用しています。

ただし、天武天皇は獣肉を完全に禁止したわけではなく、神道と仏教の両方を保護するために取った折衷案でした。これは獣肉を完全に禁止してしまうと神道の習慣と相容れなくなるためです。

仏陀の国の落穂、1897 年75-76 ページ

神によっていいことか悪いことかが決められる神道の道義心も否定せず、仏教は仏の根本的な生命の状態に新しい解釈を与えて仏とはすべての人間に潜在していると説きました。

さらに、仏教は古い宗教や倫理観を寛容的に受け入れただけでなく、発展させ、洗練させていったのです。

死者の魂は、残されたものの供養や祈りによって安らかに眠ることができると教え、原始宗教の考え方を新しく美しい形に変換していきました。

現代の日本で見られる、死者を悼む心に響く詩は、この仏教の伝達者たちが新しく考えだした教えにさかのぼることができるわけです。

小泉八雲は、中国からの彫刻、絵画、建築、装飾などを通して、仏教芸術が日本にもたらした大きな影響について何度も述べています。

仏教の僧が建てた新しい寺院は、静かで空虚な雰囲気の神道の神社とは違っており、人々は初めて見たとき驚き、讃嘆したことでしょう。

「仏教徒の絵師が極楽への美しい道を示し、人々をいざなった」

しかし、仏教が日本社会に貢献した最も素晴らしいものは教育でした。

仏教の寺院は少しずつ学校という意味を持ち始め、あらゆる人に教育を受ける場となったのです。

ここでいう教育とは、宗教だけだなく、中国から来た芸術や文字などが日本人のニーズに合うように少しずつ形を変えて教えてられていました。

日本中の市民が、仏教の僧侶から教えを受けることができたのです。

その意味で仏教は、芸術や文字の発達に大きく貢献しただけでなくモラルを教え、権威に従順になるよう教え、祖先崇拝の原始宗教ができなかった大きな希望と恐怖心の両方を刺激する力をもつ宗教として、天皇の庇護を受け、民衆の力ともなっていったのです。

その国の伝統と組み合わせた形而上の適応が、最終的に大きく受け入れられる要因となり、神道と一つの国で同居できる理由となりました。

小泉八雲と仏教 - その根源と影響

小泉八雲の記した日本仏教に関する文書はその類として先駆的なもので、書籍や演劇などを英語に訳したもの、僧侶や信者との会話、寺院や聖域への巡礼、および個人的な体験をもとに描かれています。

しかし、彼の仏教哲学へのより深い理解は、ハーバード・スペンサーやトーマス・ヘンリー・ハクスレー、アーネスト・ヘッケル、アルフレッド・ラッセル・ウォーレス、シュナイダーやその他、彼が名前を挙げている西洋哲学者や心理学者、生物学者、科学者などを深く研究していたからこそ可能だったと言えます。

特に、ハーバート・スペンサーについては心理学の分野で最も優れた学者であり、新しい世界を切り拓いたとして、自分は彼の生徒だと言っていたこともあります。

また、スペンサーの統合的哲学を知っていたお陰で、仏教哲学に対してロマンチックな興味以上の思いを抱いたと告白しています。

小泉八雲は、日本の仏教の教えを、「日本-一つの解明」、「知られざる日本の面影」、「心」、「異国風物と回想」、そして「仏陀の国の落穂」で紹介しています。

彼の作品は、純粋に啓発的な思いに基づいて書かれており、問答形式はうまく排除した書き方になっています。

最高の仏教哲学、特に涅槃と個人いうコンセプトは、西洋思想との比較においてしばしば語られています。

\

仏教の結論は、科学知識に頼らない精神的な変遷を経て得るものという考え方は彼にとって非常に驚くものでした。西洋思想の持ち主にとって未知の世界だったのです。

\

高等仏教は一元論と似ているところがあり、ドイツやイギリスの一元論者が唱える科学的論理と驚くほど一致する教義を持っています。

\

実際、仏教徒のコンセプトの種類は、西洋の分類分けと同じ現象を異なる名前で呼んでいるだけで、完全に、あるいはほぼ一致しています。

\

この類似性はあきらかに西洋思想や宗教的信念における東洋哲学の影響を物語っており、その故にこの関係は言及するに値します。

\

小泉八雲の観点から見た仏教哲学

\

小泉八雲は、仏教哲学の基本的真理を研究するに至った理由は次の3 つだと明らかにしています。まず、日本の知識層エリートを無神論者だと非難していた西洋の誤解や無知を正すため。2 つめは、日本人の多くが、完全な終息と無である涅槃の深い意味を理解していなかったため、一般的に信じられていた内容を哲学的な点から明らかにするため、そして、3 つめは、現代哲学を学んだものとして、非常に興味を引くものであったためです。

日本における12 の仏教各派を挙げ、一般に信じられている仏教哲学教義と高等なものを説明しています。

仏教のすばらしい形而上的世界をいくつか簡単に説明しつつ、同時にこれは何百万という人が信じるような世界宗教にはなりえないと判断しました。

ほとんどの人は涅槃と抽象的な考え方に問題はありませんが、自分が死んだら天国に行くと思っています。

仏教の教えは学ぶもののレベルに応じて説かれています。これが日本でいう「人を見て法を説け」ということです。

最も高等な仏教は「形而上学者の宗教であり、学者の宗教であり、何らかの哲学的な知識を持っている人でさえ理解が非常に難しい宗教」です。

深く理解することが難しい証拠に、7000 巻と言われる大量の経が著され、それに多過ぎるほどの解説書や注釈書があります。

理論および実践の難しさは、仏教形而上学の学究的アプローチが一般には会得できないものと考えられ、同時に中国語の熟達と深い信心を必要とします。

高等仏教哲学の原理を説明するのに、小泉八雲は「実在はただひとつである」という一元論の教義から始めています。

この概念は、無常を認識することから出るもので、すべての現象は名前と形状だけしかない錯覚にしか過ぎません。

現象を現象という現実を否定はしませんが、永続性という現実かどうかを判断する試験を合格することはできないため、錯覚にしか過ぎないとされるわけです。

仏教では、唯一の現実は無条件かつ永遠に存在する絶対的な仏陀のみであり、現代の日本ではこれを「心的要素」と呼んでいます。

絶対という存在はすべての関係性の上にあり、私たちが苦痛や喜びと呼ぶようなものではなく、「私」と「あなた」の間に差異を認めず、時間と空間にも区別をつけません。

また、主体と客体も分断せず、体であろうが心であろうが「絶対」以外に実体はないと説きます。

小泉八雲は、彼のエッセイである「仏陀の国の落穂」の中の「涅槃」の章で、涅槃の二元性のない状態は、「我々の前に現出している実在は、主観的であれ客観的であれ、一つであり同じ実在である」というスペンサーの統合的な立場と変わらないと述べています。

このイギリス人哲学家の論理は、二元性のない実在を知るために意識を超越する必要性をさらに高いものにしました。意識がある限り私たちは主観と客観というアンチテーゼを調節することができないからです。

この論理は、日本の禅でも受け入れられている空の概念を説く虚無的哲学とも一致します。

これは、意識は主観と客観とが接触するところから発して、ヨガカラによる理想派が支持しているように、絶対的な実在の深い要素を作り出さないと考えます。

意識の破壊は涅槃を意味します。これは個人という存在が解放され、仏の真の性質が実体化されるということです。

涅槃とは、「感覚と考えの両方で意識が完全に消滅した心の状態」です。

この点において、小泉八雲は西洋の学者に対して、涅槃というコンセプトの間違った理解は絶対的な無あるいは完全な虚無の認識が間違ってしまうと警告しています。

涅槃は確かに終息ですが、この終息は魂の死や有限が無限に再吸収されるというのとは違います。

涅槃とは、個人の終息、意識という個性の崩壊、そして「私」という言葉に含まれるすべてのものの消滅を意味します。

朽ちていく肉体につながる感情、衝動、考え、その他すべてが肉体と共に滅びてしまうわけですから、私たちが「自分自身」と呼んでいるものは結局虚偽なのです。

涅槃とは無為なのではなく解放であり、形を持たない全知全能の光の中へと溶け込んでいく感情と考えの両方を持つ意識の中にある心の最高の状態といえます。

八雲の想像をかきたてたもう一つの日本仏教のポイントは、西洋とはまったく異なる魂のコンセプトでした。

ピタゴラスやプラトーの「魂」というコンセプトは、仏教のそれとはまったく異なります。

これについて最も異なる点は、仏教では従来の意味での魂は存在しないと言っているところです。

私たちが「魂」と呼ぶものは、単に、ホコリのような過去の経験の集合あるいは凝縮した集まりでしかなく、死によって分散して次に生を受ける際にまた集合するときまで、一つに集まって常に私たちの新しい状態を作り出しています。

人間の脳は、生を受けている間、あるいは人間の有機体が集結して作りあげる有機的組織体が進化している間、永遠に続く果てしない数の経験を登録しておくようできています。

新しい存在は、遺伝の線上にある個体と同じ種類に属するとは限りません。

動物や神という存在も根拠のある力を保持しており、日本人がいうように石でさえも仏陀を敬うのです。

無情の生命と有情の生命との違いは、種類の違いではなく程度の違いにしか過ぎず、どちらも1つの同じ未知の実在の異なる出現なのです。

私たちは何百京（けい=10 の18 乗）というエネルギーの集合体であり、この地球やその他の惑星に存在した生命が無限に繰り返されているものの一つです。

個人の魂というものは存在せず、業、あるいは合成物としての個体が再び合成され、必然的な因果の応報として新しい合成物としての個体を生成しようとして消滅したあとに残る無数の欲望と傾向性でしかありません。

一つの生から次の生へと渡されるものは、印象と欲望の動きだけです。

実際に存在する一つの生と一つの死は、特定の形または状態での業であり、それは海にできる波のようなものですが、それ自体が動く波ではありません。

人間の多次元的な個性は、八雲に「私の心と魂は王国ではないが無政府共和国である...私は個人ではなく個体群である...私は呪物を信じており、多神教徒であり、イスラムを宣言する魂であり、古風な魂である....これらの間にできるものは考えるまでもなく常に問題であり、暴動であり、混乱であり、内乱である」と言わしめました。

古代ギリシャやインドの哲学者などの間でより知られている「再生」「生まれ変わり」「新生」ではなく「再個体化」という用語は八雲がうまく使ったもので、この言葉は、仏教と、無数の個人の魂の存在を受け入れる宗派との違いを非常に正確に言い当てています。

この教義を理解するには、まず個人という観念を断ち切り、人ではなく、継続する感情と意識の状態を考える必要があります。

一つの実在がすべてを貫いており、主観と客観のどちらの存在もすべて身口意の結果である業の作り出した現象の集合にしか過ぎないのです。

宇宙にとって良いことは、良い結果をもたらす行動や考えの結果であり、悪は邪悪な行動や考えなのです。

生と死という生命の旅は続いていくもので、低い世界から地球上に、そしてさらに素晴らしい世界へと上がっていくことができるのです。

これを通っていくことができる人は、自身に対する執着から解放され、無上の喜びの世界へと入ることができます。

宇宙全体は精神的進化を通して動いており、最終目的は涅槃です。

この精神的進化のプロセスは、自由と完全に向かって進む人類の倫理的熱望に深く基づいており、極東に住む人々の精神性全体にしみ透っています。

これはあらゆる感情に影響を与え、直接的および間接的にあらゆる行動にも影響を与えています。

八雲は、業という教義が、現在科学の説く傾向性の遺伝伝達と一部相容れるものだということを発見しました。

彼は、永遠に続く個と一度きりの生という理論にしがみつく人間を、それでは存在している宇宙の中にモラルという意味を見つけられないとして、公然と弾劾しました。

さらに、再個体化という考えが人の意識のおよぼすポジティブな影響を挙げ、特に死をまだ恐れる前の段階の子供にとって非常に有効であるとしました。これは、子供たちが既に今まで何百万回も生と死を繰り返してきているということを学び、厳しい冬の雪が終わったあとの楽しい春や夏をまた楽しむことができるのだ、と期待できるからです。

八雲にとって、形而上的なものの見方は、単に筋が通っているだけでなく、異なる方法に合った異なる理想が必要だったからです。

経験的な世界の下降は、永遠で変わることのない真実を覆い隠してしまう幻想で、真実はこの幻想を取り除くことで初めて輝くのですから、幻想は必然的に自己放棄につながってしまうのです。

この幻想世界を破棄し、仏教で説く喜悦へ導く誘因は数えきれないほどあり、八雲の言う「本当に知りたいと願うものはこの幻影を愛さず、人類の成したことや行動について考えることに喜びを感じてはなりません。この悲惨な世界で人類が悲惨な状態で手に入れようとやっきになっている、短絡的な愛や名誉、栄誉というものは、飛んでいく泡のように空虚です。」という精神を持つのです。

八雲は、幻想に対する不十分な理解が物事と精神の間にもたらす相容れない関係についても触れています。

情欲から逃れようと自殺を図る若い僧侶や、修道院へ入るために顔を焼いてしまった美しい女性のお話しがその例です。

このような世界を超越するには、どれほど崇高なことであっても自己中心的なことを続けても意味はなく、精神的な成長をするしかありません。

絶対的な視点から、たとえ極楽を願うものであろうが、精神的な解放を願うものであろうが、すべての欲望を抑制し、最終的には抑止する必要があります。

「人は喜びのために極楽を求めるべきではない。涅槃それ自体への思いが消滅してから初めて涅槃に到達できるのだ」

人間の通る道は、極端な行動や間違い、誤解に満ち満ちているが、彼の行動は善きにつけ悪しきにつけ、幻影の世界にあるものです。

明らかに見える人には、愛と憎しみ、喜びと苦痛、希望と後悔といった自己の感情はすべて影でしかないのです。

無数の生と死の繰り返しは、実際には存在しないのです。

これは時間の中で起きていることで、時間それ自体が幻影なのです。

すべての変化を超えて残る変化しない実在を理解した八雲は、現代のヘラクイトレスのようにあらゆる二元性を超越し、彼の存在の深いところから「若さと老化、美と恐怖、可愛さと醜さには違いはない。死と生も一つの同じものなのだ」と宣言しました。

ここでの「同じ」という言葉は、疑いなく現象に関して言っているのではなく、宇宙の時の中で異なる位置と形態を持っていても、それらの真実の要素は同じであり、共通であり、変化しない、仏の絶対的な性質であると言っているのです。

涅槃の状態は、現象世界-または輪廻転生-からの要素において異なるわけではなく、その現実の存在のより明らかな認識をさしています。

八雲の出来（しゅったい）に関する仏教教義の短い報告書の中に、絶対的な実在が自己を無限の主観的および客観的本質を持つ宇宙時間軸として投影する方法について、八雲はこの「絶対」とは、これ以上進化することのないすべての形状の元であり最終的な段階であると述べています。「すべての形状の進化は形のないところから非物質的な統合からのあらゆる物質的現象を使って始まり、最終的にはすべては元の状態に戻らなくてはならない。これは個人的人格における興奮はなく、つまりこれが「最高の空」の状態だ」というのです。

解放の道程は、すべてに浸透している神性を段階的に認識することから成り立ちます。

すべての形あるものを超えて出来（しゅったい）した彼は、彼が常に仏陀であったことを知覚します。

本来の自分を知覚するための道は、悟りを得た先師たち、つまり1 人の絶対的な仏陀の具現化したものである如来の教えによって導かれます。

無限とは、可能性としてすべての生き物に内在し、最終的にすべての生き物がそれを知覚する必要があります。

塵の一粒でさえも、仏性に至らないものはないのです。

最後に

八雲の日本の宗教に対する興味と著作は、彼自身の宗教と哲学の方向性がどこにあるのか学者を混乱させてきました。

彼の仏教に関する著作をさっと読んだだけでは、仏教哲学を注意深く学び、仏教の聖地を訪れ、数多くの仏教説話に関する著作を残した八雲は仏教徒になったと考えるかも知れません。また、彼の遺族は豊島区雑司ヶ谷にある墓地に仏教の墓を建てているのですから。

しかし、そのような解釈は独断ともいえるもので、真実ではありません。彼自身は正式に仏教徒になったことはありませんし、彼の長男に対する個人的な最後の望みは位牌を普通の壺に入れて、宗教的な儀式をせずに山に埋葬してくれということだけでした。

八雲は特定の宗教に熱中したことは一度もありません。

彼の仏教に関する研究は、実践と哲学という2つの面から成っています。

実践的な視点から、儀式や芸術、習慣などにおける影響として仏教徒の毎日の生活について研究しました。

日本芸術や文学の簡素さに魅かれ、日本の一般的な仏教徒の感情や偏見などが読者に伝わるよう努力したのです。

仏教哲学に対する傾倒は、彼自身も「今まで存在したどれよりも高度な普遍的な科学的信念」と言っているように、否定できないほど明確です。

しかし、彼はその教義にはまったことはなく、常に推計学的な観察者であり続けました。

彼の研究は、教義や狭い心による束縛を超えたところにある普遍の真理に対する何層にも分かれた努力から成っています。

科学を根本とする西洋の知識の限界を変革する絶対的な自由と、宗教的な東洋は、八雲の興味と追及を魅了してやまない無尽蔵の泉なのです。

彼の研究は、コンセプトのパターンから起こした教義的な説明を提供するためではなく、それ自体が熟考した知覚なのです。

彼の目的は彼の意識の範囲を拡大し、読者の知性の風景を広げることにあるのです。